

小坪神楽をもう一度

今年も神楽のきせつがやってきました。ふえやたいこのはやしに合わせて舞子たちが一生けんめいに舞っています。どの顔も明るくかがやいています。見ている人たちも体を乗り出してみつめています。

その様子を、ほほえみながら見ている西本さんは、しずかに目をとじました。

今から六十三年前、せんそうから帰ってきた西本さんをふるさとに温かくむかえてくれました。しかし、その時、この小坪神楽は一時中だんされていきました。せんそうで、舞子である青年が少なくなっていたからです。

西本さんたち青年は、小坪の人たちが楽しみにしている神楽をさい開しようとして小坪の人たちによびかけました。しかし、当時日本は、せんそうに負けたばかりでこんらんしていました。人々はその日の生活を立てることがせい一ぱいで、神楽のことを考えるゆとりはありませんでした。しかも、やるとなると、練習にかかる時間や体力はそうとうなもので、反対する人たちも多かったのです。それでも西本さんは声を大にしてうったえました。

「みなさんの気持ちはよく分かります。たしかに大へんです。だからこそ、昔から小坪の人たちがなれ親しんできた神楽をもう一度さい開させ、小坪のみなさんの楽しみを作りましょう。」



このよびかけに人々はなつとくしさんせいしました。さっそく練習が始まりました。みんな一生けんめい練習しました。

ところが、本番三日前の朝、とつぜん、長浜ちゅうざい所のおまわりさんがやってきました。

「西本さん、祭りに神楽を舞われるそうですが、きよかを取っておられますか。」

「えっ、そんなものがあるんですか。きよかはとっておりません。」

「きよかを取っていないのなら、神楽はできません。さっそく取りやめてください。しかし、もしきよかを取るのであれば、福岡ふくおかにある米軍じょうほう局まで行ってください。」

思いもかけないでん開に、西本さんたちはこまりはてました。今さらここまできて、神楽をやめるわけにはいきません。小坪の人たちも楽しみにして待ちのぞんでいるのです。とにかくきよかを取りに行こう。しかし、福岡まで行く旅費りよひがありません。その場にいたものがお金を出し合つてやつと旅費ができました。

「どにかく福岡に行つてくる。もし、けいさつから文くを言われたら、今きよかを取りに福岡に行つているからと言って、なんとしても練習はつづけてくれ。」西本さんは、みんなにそう言いのこして、広駅に急ぎ、どうにか夜行列車に乗りこみました。

次の日の朝ようやく、博多はかたの米軍べいぐんじょうほう局に着きました。しかし、その日は休みでした。西本さんは体中の力がぬけてしまったように感じました。祭りは目前にせまっています。一日のゆうよもありません。とほうにくれています。守えいさんが一人のアメリカ軍のしょう校せうがうさんをしょうかいしてくれました。こと

わられるかもしれない。そう思いましたが、たとえ床にひれふしてしてもきよかをもらわなくては。西本さんは、そう決心して、

萩祭りに神楽を舞いたいので、きよかのおねがいに来ました。よろしくおねがいます。」

と、事じょうをせつ明しました。

分かりました。だれにも遠りよはいりませんから、神楽を舞ってください。」

上手な日本語で返事が返ってきました。

「ありがとうございます。」

西本さんはおがむような気持ちで書るいを受け取りました。そして、すぐ電ぼうを打ちました。

ギョカ、トレタ」

西本さんが、広駅に帰って来たのは、その日の夜の十二時前でした。はやる心をおさえながら、小坪への山道を走るようにして歩きました。とちゅう、小坪の家々の明かりが見えてきたとき、はっと立ち止まりました。ぼんやりとかぶ明かりのむこうから、かすかにふえや太この音が聞こえてきたのです。

やってる、やってる。」

思わず大きな声でさけびました。うれしくて安心してとたん、西本さんは、その場にすわりこんでしまいました。家々の明かりが、なみだでにじんで見えなくなりしました。

よく日のよい祭り当日、小坪八幡神社はちまんには、あふれんばかりの小坪の人たちが集まりました。人々は日ごろのつかれをわすれ、神楽に見入っていました。神楽を舞う人も、見る人も、一体となって神楽を楽しんでいました。

「あのころは本当に大へんでした。今考えると、あの時代によく思い切ってやったものだなとも思います。でも、やってよかったとみんな思っていると思いますよ。これからも、小坪神楽が受けつがれ、小坪の人たちの宝であり続けてほしいですね。」

西本さんは静かにそう言って、ふたたび神楽に見入っていました。

げんざい、小坪神楽は小坪の自治会の人たちを中心に毎年行われています。さい近は女子も舞子になれるそうで舞子きぼう者が多くなり、ちゅうせんで決めているそうです。そして毎年秋になると、ふるさと小坪をはなれている人たちも、神楽を見に帰ってくるそうです。また、小坪の人だけでなく、遠方からの見物客もおとずれ、見る人たちの心をなごませています。



さし絵 木田 重雄

小坪神楽について

今から約二百年前、小坪の石灰運搬船が、たまたま伊予大三島に寄港した際、大山祇神社の神楽を習い覚え、小坪八幡神社の祭りに舞ったのが初めとされる。

第二次世界大戦までは、地元の青年団が中心となって奉納していたが、戦後、青年団が解散され中断していた。その後、改めて青年同志会が組織されて引き継ぎ、昭和三十六年になって自治会が受け継ぎ、現在に至っている。

呉の無形文化財に指定されている。